silver lagoon－シルバー ラグーン－

鏡屋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ｓｉｌｖｅｒ　ｌａｇｏｏｎ－シルバー　ラグーン－

【Ｎコード】
Ｎ９３８６Ｙ

【作者名】
鏡屋

【あらすじ】
※これは銀魂とＢＬＡＣＫ　ＬＡＧＯＯＮのクロスオーバーです。

～あらすじみたいな？～
事は一つの電話から始まる。
その電話は銀時の人生を変えるといっても過言ではない。
新八、神楽から姿を消し、銀時が向かった先は―…
見たこともない、ただ青い海が広がる船の上だった。

序章●ドヤ顔してもかっこ悪い奴はかっこ悪い（前書き）

銀時「はーい、始まりました。銀魂、ブララグ混合小説」
新八「ブララグって…またマイナーですよね」
神楽「そうアル。どうせなら『とある～』とか『リリカル～』とかにしたら良かったネ」

銀時「それを言うなや。おまッ、バッカ。ほんとバカなー」
神楽「誰が馬鹿ネ。それを言うならこんなマイナーなの選んだ作者ネ」
新八「…お前ら…カオスになってくるからもう喋んな」

序章●ドヤ顔してもかっこ悪い奴はかっこ悪い

「あー、だりぃ…誰が好き好んで源外のジジイのとこにいかにゃならねぇんだよ」

銀髪で死んだ魚のような眼をした男がそうボヤキながら歩く。

その男の名は坂田銀時。…本人曰く『宇宙一バカな侍だコノヤロー』だそうだ。

なぜ銀時がカラクリ技師源外のもとへ向かっているのかと言うと時を遡って一時間前。

＊＊＊

―ジリリリーン

「新ぱっつぁああん、電話だぜー？」

「はいはいはーい。万屋でーす」

新八は受話器を受け『はい』を繰り返す。

それを聞きながら銀時はジャンプに目を通す。

「―…はい、わかりました。今向かわせますんで」

ガチャリと受話器を下す音が聞こえ新八がこっちに向かってくる足音が聞こえた。

銀時はその方向へチラリと目をやる。

「どーしたー？依頼かー？」

「はい。銀さん今から源外さんのとこ行ってきてくださいよ」
「は？俺？今忙しいんだけど…見てわからね？」
「何が忙しいんですか！！！ジャンプ片手にゴロゴロしてるだけでしょーーーが！！！」

新八はヒステリックに叫んでいる。
突っ込みもここまでくれば引く。というか恐ろしい。
何が新八をここまで変えてしまったのか…。

「銀さんの所為ですよ！！！」
「あーあー、分かったよ、分かりましたよ！！行けばいいんでしょ、行けば！！」
「最初からそうしてください。まったく」

「さっきから私空気アルなー」
「「いたの？」」
「糞ダメガネは黙ってればいいネ」

＊＊＊

—…と言うことである。

「まったく人使いがあらいっつの！！！つーか、ゴロゴロなら神楽だって…」

神楽にそれを言っても返り討ちにあうだけだ。
考えるのは…よそう。それにしても納得がいかない。

「はぁ…源外のジジイの依頼なんてぜってぇ碌なモンじゃねぇよ。今からでも遅くない！引き返そうかな」

そう考えたところでついさっき万事屋を出るとき新八に言われた言葉を思い出す。
『帰ってきたら姉上に銀さんが仕事しない事報告しますから』
―…と新八に言われた銀時。源外のジジイの所行って碌でもない依頼を受けるのと
戻って新八の姉、妙にダークマター…真っ黒焦げの可哀想な卵のフルコースを味わうのと
どっちがいいかと聞かれたら答は明白。

「ジジイ何の依頼だよ。シンプルイズベストだぜ。お願いだから簡単ので」
「店前でギャーギャー騒ぐな！近所迷惑だろーが」
「ジジイ、テメーが言うなボケェェェエエエ」

つーか、機械ガシャコンガシャコン動かしてるのによく聞こえたなジジイ。

「銀の字、オメェにはこの機会の中に入ってほしいんじゃ」
「ハァ？俺がこの中に？オイオイ、冗談じゃねぇぞ。こんな怪しい機械の中になんて…」
「ポチっとな」

源外のジジイは人の話を聞かず、赤いスイッチを押した。
その途端その機械が物凄い吸引力を発揮しだした。
銀時は近くにあった机にしがみつく。机はビクともしてない。
床に張り付けてあるらしい。命拾いした。

「ちょ、何コレ…新型の掃除機？にしては…吸引力半端なすぎだろーがァァアア！！！吸い込まれるぅぅぅ」

「銀の字ィィ、机から手を離せ！！！諦めて吸い込まれろォ。そして実験台になれェェェ」
「嫌じゃボケェェェェ…ってヤヴぁーイ。もう銀さん手に力入らねぇよ！？」

―ベリベリ

「ジジイ――――！！！何俺の指一本一本机から剥がそうとしてやがるんだ！！！」
「あと一本…銀の字…チェックメイトだ」
「テメーのドヤ顔なんてかっこよくねぇんだよ！！！糞ジジィィィィ」

こうして銀時はからくり堂から…かぶき町から姿を消した。

「主人公大事にしろー！！！コノヤローー」

序章●ドヤ顔してもかっこ悪い奴はかっこ悪い（後書き）

新八「何とか序章終わったんじゃないですか？」
神楽「解せぬ。実に解せぬアル」
銀時「あ？いいじゃねーの。これから銀さんが暴れる場所へレッツパァリィ☆だぜ」
新八「…違います銀さん。クロスオーバーする原作間違ってます」

第一話●ちょっと来いでちょっとで終わった試はない（前書き）

銀時「おい。やっと出番だぜ」
新八「…ほんとですよ」
神楽「銀ちゃん、いつブララグ界で暴れるアルか？」

銀時「第一話からだよ。きっと！！じゃねぇと唯のgd gd小説だろーが」
新八「いや、なんか言い辛いですけど最初からgd gdな気が…」
銀・神「眼鏡は黙ってろや」

第一話●ちょっと来いでちょっとで終わった試はない

源外のジジイの意味不明な機械に吸い込まれた銀時。
気付くとどこか知らない船の上。銀時は一気に表情を青くする。

「え？これってやばくね？軽くなんかのフラグ立ってね？夢だろコレ…痛ェーよ！？」

銀時が何度も自分の頬を抓っていると、ドカッと何かが吹き飛ばされるような音がした。
銀時は恐る恐る音がした方向をのぞき見る。
すると銃を持った赤毛の女が荷物を蹴飛ばしていた。

―…雰囲気から見るにアイツはこの船をジャックしてるわけだな。
うん。でもこれはない。ないよ、これは。
ジャックされてる船に飛ばされたなんて…ないないない。

「―…これは静かに様子を見る、の方向で」

銀時はなるべくその場から遠ざかろうと抜け足差し足でその場を去ろうとした。
が、懐からぬ〝ーとヅラの不気味なイビキのような音が鳴り響いた。
銀時は慌ててその音の正体を探す。すると先程までなかったはずの携帯電話があった。

「なんでこんなものが…メール？」

『銀の字がどこに飛ぶか分からないだろう、と携帯電話を忍ばせておいたのだ』

銀時はこの文章を見た瞬間、携帯をぶっ壊したくなったが、抑える。
今の銀時にとって携帯が唯一の頼みの綱だ。
『銀の字のいる世界がこっちの世界と同じ言葉を使ってるとは限らん』
―…つまりは何が言いてぇんだよ、糞ジジイ。
『これもまた忍ばせておいたんじゃが、銀の字、ポケットを見ろ』
銀時はメールの指示通り自分のズボンのポケットを見る。
すると『言葉わかーる』と何とも安直な名前の錠剤の瓶があった。
『それを飲め。それですべて解決（笑）』
「（笑）じゃねぇぇぇぇぇぇっ！！！」
銀時は思わず携帯に向かって怒鳴っていた。
ジャキッと頭の後ろで音が聞こえた…様な気が…気のせい…
「じゃねぇなこりゃ」
振り返ると銃を持った赤毛女とハゲがいた。
「〜〜〜」
何言っているのか全く理解できなかったがジェスチャーでなんとなく分かった。

『ちょっと来い』ですね、分かります。

＊＊＊

「～～～～～～」

「～～～～～」

―…赤毛の女とハゲが何か話しているが全然意味が解らねェ。

仕方ない。滅茶苦茶怪しいが…これに頼ろう。

銀時は源外が用意した『言葉わかーる』を飲んだ。

すると先程まで全然分からなかった言葉が分かるようになった。

「おい、ダッチ、日本人は一人じゃなかったのかよ」

「…二人いるみたいだな…調査ミスか？」

どうやら銀時以外にも日本人がいるらしい。

周りを見回してみると真っ白いシャツにネクタイといった如何にもなやつがいる。

―…あー。絶対アイツだよ。もう一人の日本人。シャツだもの。ネクタイだもの。

他の奴らなんてTシャツとかラフな感じなのに一人だけサラリーマンスタイルだもの。

銀時は銃を突き付けられても呑気にそんなことを考えていた。

それが気に食わなかったのか赤毛の女は銀時を蹴り倒した。

銀時は途端に赤毛の女を睨み付ける。

「目つきには気をつけろよ？クソ天パ」

「天パだと？ハッ、テメェも言葉使いには気をつけやがれ」
「上等」

赤毛女は銃を二兆取り出し銀時に向けた。
その途端、銀時が木刀で銃を弾き飛ばす。
まさか木の棒で弾かれるとは思っていなかったのか、赤毛女は目を見開いている。
銀時はその隙をついて逃げ出そうと思ったが、後ろに大柄の男がいたことに気づきやめた。
逃げ出した途端、ズガンだ。

―…くそっ、ハゲめ。

「ほら、レヴィ」

銀時が弾いた銃を大柄の男が拾い赤毛女に渡す。
赤毛女は不機嫌そうに受け取って銀時を睨み付ける。
そして赤毛女は舌打ちだけ残してその場を離れた。

突き付けられていた銃が離れ一安心した銀時は空を見上げた。
透き通るほど空が青い。先程までいた江戸の空となんら変わらない姿。

「はぁ…帰りたい。畜生」

第一話●ちょっと来いでちょっとで終わった試はない（後書き）

銀時「な？な？俺やっとブラブラグ界で活躍したぞ！」
神楽「銀ちゃんはただバカやってただけアル」
新八「ですよねー。携帯を怒鳴ってバレるなんて間抜けすぎますよ！！」

銀時「テメー等、ここぞとばかりに…まぁいい。テメー等は所詮、前書きと後書きにしか出番がねぇんだ。銀さんは大人だから八つ当たりされても気にしませーん」
神・新「うぜぇぇぇぇぇ」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9386y/

silver lagoon－シルバー ラグーン－

2011年12月8日00時56分発行